

【二】 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

岡山県に住む小学校四年生の壮太は、ある事件がきっかけで、テレビの特集で取り上げられていた「山村留学センター」に行きたいと思うようになる。両親を説得した壮太は、沙也（四年生）、雄大（三年生）、たくと（二年生）、みき（二年生）ら十三人の児童とともに、四国の山の中にある山村留学センターで集団生活を送っている。

あんまり退屈たいくつなので、トラップを取り出した。

「トランプやる人。」

札を切りながらホールのみんなに声をかけたら、「はい。」「はい。」といくつもの手があがった。ここがセンターのいいところだ。遊び相手に困らない。お、沙也の手もあがっている。よしつ。ほくは張り切った。

「なにやる？」

たくとが、^{*1}「ババぬきー。」と言った。ぼくはほんとうは大富豪^{だいきごう}がやりたかつたけど、
 こは小さい子に合わせるべきだ。

ババぬきなんてとバカにしていたのに、負けがたてこんだ。まったくついてない。右隣の雄大からことごとくババを引かされてしまう。そのたび、「うししし。」と意味深に笑うので腹がたった。

「やめえや！ バレるが。」

おかげで順番が次のたぐとはとても用心深くなり、ばくの手元にはいつもババが残された。

「くっそう！」

① 札を投げ出し、ホールの床にひっくり返ってふてくされた。

だから沙也が、

「じゃ、次は神経衰弱すいじやくやろ。」

と言ってくれたときにはほっとした。神経衰弱なら得意だ。これならぜったいに負けない。ほくは気合いを入れてすわり直した。

三、三、三……。確かあのあたりにあつたはず。よしつ、ゲットォー！次々同じ札を引き当てるべくに、雄大がさせるのがわかつた。少しずつひざを進めて身を乗り出してくる。

「雄大、近すぎ。」

「いいじゃん、このくらい。」

目はトランプに張り付いたままで、ほくの言うことなんかまったく無視。沙也がたて続けに三組取った。ほくは上目づかいに沙也の手の札の厚みを測る。いい勝負みたい。ぜったいに沙也には負けたくない。次、ほくの番だ。キング、キング、キング……。ほくが雄大のひざ先の札に手をのばしたとたん、雄大がひざで押さへこんだ。

「いってえ。なにすんだよ！」

はさまれた指がめつちや痛かつた。

「これはぼくんだ！」

「はあ？」

「なにそれ？」

沙也もたくともあきれた声をあげた。

「ずっとねらってたんだ！」

「だからって、おまえのなわけないじゃん。」

「そんなの雄大が勝手に思ってただけでしょ。カンケーないじゃん。」

「そうだよ。キングだろ、それ。わかってんだからよこせ。」

「いやだ！ぜったいにいやだ。」

とうとう雄大は体を丸めて、札をお腹にかかえこんだ。

「ずるう、ずるう。」

たくとがはやしたてた。みきまでが、

「雄大くんってうそつくし、ずるだし、サイテー。」

とくちびるをゆがませた。

そこから
②
ように、

「ゆうべだって、おかわりの列に横入りした。」

「トイレのそうじ当番だったくせに、洗剤せんざいもらってくるとか言ってバックれた。」
*3

全員が口々に、雄大こうげきを始めた。^③ ぼくの中の残酷なにかがうごめき出す。

「そうだよ。この間、事務室の引き出しに松^{*4} あんが隠^{かく}してたチョコレート^{チョコレート}をぬすみ食
いしてバレたときだつて、『はくはやってない。壮くんが無理やりくれた。』つてうそつ
きやがつた。」

気がついたら、口からつばを飛ばしながらまくしたてていた。すっかり頭に血が上っていた。こうなつたらとまらない。これでもか、これでもかというくらい、雄大の悪口大会が始まった。

一対四。みんなに責めたてられ、雄大のくちびるがぶるぶるふるえた。そしたらとつぜん、

「うわああー。」

とさげし声^{こゑ}をあげて仁王^{におう}立ちになったと思ったら、足でトランプをけ散らし始めた。

「きゃー。」

「やめろやー！」

① 大そうどうの中、ぼくは急いで雄大のひざの下にあつた札^はを拾い上げた。おー、やつぱりキングだ！

にんまり笑つたとたん、雄大がホールを飛び出して玄関^{げんかん}へダッシュするのが見えた。

——どこ行くんだ？

と思つたけど、追う気になんてならなかった。せつかく勝てそうだったのに、あいつのせいで台無しだ。雄大つて、いつもそうだ。みんなが盛り上がつてるときに白けさせる名人。ほっときやいい。

晩ごはんの時間が近くなつても、雄大は帰つてこなかった。部屋にもセンターの周りにも姿が見えない。冬間近の山は日暮れが早い。まだ五時半なのに、日はとつぷりと暮れていた。

センター長に報告したら、いつも笑っているセンター長から笑顔^{えが}が消えた。「それで？」「それから？」と緊張^{きんきやう}した面持ち^{おも}で質問を重ね、ぼくから大まかな状況^{じやうきやう}を聞き出すと、

「まずいな。」

とつぶやいて立ち上がった。眉間^{みけん}には深いしわが寄っている。いわゆる仁王顔。こういうときのセンター長は、人が変わったみたいに迫力^{はくりき}がある。

——もしかして、なにかとんでもないことがおこつたのか？

さすがにぼくも不安になった。

みんなで手分けして探すことになった。

——どうせどつかそのへんに隠れてすねてんだろ。

それでもまだぼくは軽く考えていた。めんどつくさいやつと、腹をたてていた。

「雄大、早く出てこいよー。」

盛り上がつてるベッドのふとんをたたく。……いない。風にゆれてるカーテンの陰^{かげ}をのぞく。……いない。

「おーい、雄大ー。めしだぞー。」

真つ暗な屋外から松つあの声が聞こえてくる。

ヘイセイ

をよそおってはいるけど、やつぱりどこか緊張している。川面^{かわも}を走る懐中電灯^{かいちゆうとう}の明かりが不安をますますかきたてた。

——だいじょうぶなのか？ 雄大。

⑤ ようやくぼくの胸がさわぎ始めた。二学期が始まっても帰つてこなかった雄大。ぼくの作つた鉄砲^{てつぽう}をうれしそうになでていた雄大。そんな雄大の姿ばかりが目の前にちらつく。

一時間が過ぎても、二時間が過ぎても、雄大は見つからなかった。

晩ごはんを先にすませるように言われたぼくらは、食卓^{しょくたく}にはついたものの気が気じゃなく、あわただしい動きを見せるセンター長や松つあんを目で追っていた。

「そうですか。元さん^{*5}のところに何行つてないですか。はい、はい。」

事務室から元さんに電話するセンター長の声がもれてくる。

「みんなで、雄大一人をこうげきしたよね……。」

しよんぼりと、冷えたハヤシライス^⑥をスプーンの先でついていた沙也がつぶやいた。ぼくの胸がゴトンと音をたててはねた。ここへ来る前、学校でも家でも居場所をなくしていた自分を思い出した。ここにきてやつと、みんなのいることがぼくの居場所だつて思えるようになった。なのにはぼくは、今の雄大にとってたつたひとつの居場所であることを、うばうようなことをした。

——わあー。

ぼくはさげびそうになった。いつもだったら軽く三杯^{さんぱい}は平らげるハヤシライスがのどにつかえて、どうしても胃までおりていかなかった。

「まだ帰らんか。」

頭にヘッドライトをつけた元さんが玄関に飛びこんできたのは、お皿を洗っていたときだった。鉄砲^{*6}をかついで、クロも連れている。クロはしつぽをピンツとたてて、目を大きく見開いている。すっかり臨戦態勢だ。

「今年はドングリが不作で、クマの冬眠^{とうみん}がおくれとるからな、もし山に入つとつたら危険や。」

元さんの顔からはいつものへらへら笑いが消えていた。ぼくの頭からいっきに血の気が引いた。

——大変なことになった！

「ちよつくら行つてくるわ。」

身をひるがえして、すぐに元さんとクロは山に向かった。^⑦夜の山のおそろしさは、いつも元さんから聞かされている。玄関につつ立って元さんとクロを見送ったほくたちは、全員が無言だった。

消灯一時間前のセンターは、いつもだったら一番そうぞうしい時間帯だ。テレビをみたり、ゲームに興じたり、みんなの笑い声が八角形の屋根の下にひびきわたる。

なのに今日は、センター中がしずまりかえっていた。空気までこおりついたように動かない。事務室からは、消防署と雄大の親へ連絡するセンター長の声が聞こえてくる。ぼつりぼつりと交代で風呂には入るものの、だれも寝に行こうとはしなかった。どうせねむれないことはわかっていた。

ぼくは息苦しくなつて、そつとセンターをぬけ出した。夜の空が落ちてきそうな存在感で迫ってきた。目の前の真つ黒な巨人みたいな山に目をこらす。ぼくは、いつ元さんの鉄砲の音がひびきわたるかとおびくついていた。最初はなんにも見えなかったけれど、じつと見つめていると漆黒の山肌^{しつこく}にときおりホタルみたいにたよりない光がちらつくのが見えた。

——元さん、もうあんなとこまで上ったんだ。

こぶしに握った^{にぎ}ぼくの手のひらに、いつの間にか爪^{つめ}が食いこんでいた。

(八束澄子「ぼくらの山の学校」(PHP研究所)より)

注 *1 ババぬき＝トランプを使った遊びの一つ。「大富豪」「神経衰弱」も同じ。

*2 意味深に＝意味ありげに。

*3 バックれた＝にげた。さぼった。

*4 松つあん＝山村留学センターの職員。

*5 元さん＝山村留学センターをよくおとずれる地元の^{りようし}猟師。

*6 クロ＝元さんが飼っている^{りようけん}猟犬。

(1) ——線部①「札を投げ出し、ホールの床にひっくり返ってふてくされた。」とありますが、なぜふてくされたのですか。最も適当なものを、次の中から選びなさい。

ア 沙也に良いところを見せようと張り切っていたが、逆に同情されるほど負けがたてこんだから。

イ すぐに年下の子たちに勝てると思っていたが、みんなの意外な強さに歯が立たないでいたから。

ウ ババぬきなど簡単だと思っていたが、雄大のせいで思うように勝つことができないでいたから。

エ ほんとうは大富豪がやりたかったが、たとえやみきのためにしかたなくババぬきをしていたから。

(2) ② には、「歯止めがきかなくなる」という意味の次の慣用句が入ります。

() 内に入る言葉をひらがな二字で答えなさい。

() がはずれた

(3) ——線部③「ぼくの中の残酷ななにか」とはどのようなものだと考えられますか。最も適当なものを、次の中から選びなさい。

ア 雄大の味方がだれもない状況につけこんで、雄大をさらに痛めつけてやりた
いと思う気持ち。

イ 雄大への悪口大会を利用して、自分は裏切っていないことをみんなにも伝えた
いと思う気持ち。

ウ 雄大のよくない行動をあげつらうことで、トランプに関する言い争いに勝ちた
いと思う気持ち。

エ すでに十分傷ついている雄大のことを、もっと責めたてて言うことを聞かせた
いと思う気持ち。

(4) —線部④「大そうどうの中、ぼくは急いで雄大のひざの下にあった札を拾い上げた。」とありますが、このときの壮太について説明したものとして最も適当なものを、次の中から選びなさい。

ア 雄大が押さえてはなさなかったトランプの札をうばい取ることで、雄大をもっとおこらせてやろうとしている。

イ 取り乱している雄大を気にとめることなく、トランプの札が自分の予想通りだったかどうか確かめようとしている。

ウ 沙也に勝てそうなゲームをやめたくなかったので、トランプの札が飛び散らないように拾いあげようとしている。

エ 周りの子供たちが雄大に対する悪口を言ったことで満足し、雄大のことより自分の記憶きおくの正しさが気になっている。

(5) —線部⑤「ようやくぼくの胸がさわぎ始めた。」とありますが、その理由はどのようなことですか。最も適当なものを、次の中から選びなさい。

ア みんなを白けさせた雄大が悪いと思っていたが、追いつくようなことをした自分たちも悪いと思うようになったこと。

イ 雄大は部屋かセンターの周りに隠れていると思っていたが、みんなで探してもいっこうに見つけられないでいること。

ウ 雄大がすねて帰ってこなかったり、呼びかけに応じなかったりと、雄大の思い出がよみがえるような状況であること。

エ 大人たちが緊張した様子で雄大が出ていった事情を聞いたり、周辺を探したりと、ふだんとはまるでちがっていること。

(6) —線部⑥「ぼくの胸がゴトンと音をたててはねた。」とありますが、壮太はどのようなことに気づいたのですか。四十字以内で説明しなさい。

(7) —線部⑦「夜の山のおそろしさは、いつも元さんから聞かされている。」とありますが、壮太が夜の山をどのように感じているかがわかる表現を、これより後の文章の中から十字程度でぬき出しなさい。

(8) —線部⑧「元さん、もうあんなとこまで上ったんだ。」とありますが、この時の壮太の気持ちを説明したものとして最も適当なものを、次の中から選びなさい。

ア 山の奥おくまで分け入る元さんの様子から、クマが出る危険をかえりみずに雄大を探していることがわかり、元さんの無事ばかりを気にしている。

イ 勢いよく山を登る元さんの様子を見て、雄大はきつと見つかるだろうと思い、二人の無事を願うとともに後悔こうかいする気持ちがこみあげている。

ウ 全力で雄大を探す元さんの様子から、雄大がどれほど危険な状態に置かれているかがわかり、雄大のことを心配して気持ちが張りつめている。

エ けんめいに山を登る元さんの様子を見て、大変なことをしてしまったと思い、あせりを感じるとともに雄大に対するいらだちを感じている。

(9) 文章中の ヘイセイ を漢字に直しなさい。(ハネやハライなどの点画もきちんと書くこと。)

【二】 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

ウメとサクラには、共通の性質が多くあります。しかし、ウメには、サクラにある特徴のいくつかが欠けています。ウメは、サクラのもつそれらの特徴的な性質をうらやましがっているかもしれません。

そのように思うと、「ウメとサクラには、どのような性質のちがいがあるのか」との疑問が改めて生まれます。同時に、「ウメがサクラをうらやんでいるというのは、どのようなことか」との「ふしぎ」が浮上します。

ウメがサクラをうらやましがっている一つ目は、サクラが色の名前に使われることです。桜色といえは、サクラの花のようにほんのりと赤みを帯びた色を指します。桜色をした魚のタイ(鯛)は、桜鯛といわれます。それに対し、ウメ色とはいわれません。

① ウメがサクラをうらやましがっている二つ目は、葉っぱの香りです。サクラの花の香りはウメに比べて弱いですが、葉っぱからは、おいしい香りが発散します。葉っぱを傷つけると、ほのかに桜もちの香りがします。これは「クマリン」という物質によるものです。

この香りは、人間にはおいしさを感じさせますが、虫にはいやな香りなのです。葉っぱが傷つけられるということは、サクラにとっては、虫にかじられるということです。そのため、虫のいやがる香りを発散させて、虫を追いはらおうとしているのです。

ソメイヨシノなどのサクラの葉っぱから、この香りはただよいいます。でも、古くから、桜もちに使われる場合には、オオシマザクラの葉っぱを一年間塩づけにしておくという、香りが強くなるようなくふうがなされています。

ウメがサクラをうらやましがっている三つ目は、赤ちゃんにつけられる名前です。その年に生まれた赤ちゃんにつけられる名前の人気ランキングが、いくつかの企業から発表されます。それによると、毎年、サクラという名前はランキングの上位にあります。

たとえば、二〇一六年のある調査では「葵(あおい)」が第一位でしたが、「さくら」が第二位でした。サクラに由来する名前としては、この年は他にも、第五位に「咲良(さくら)」があり、第十一位に「美桜(みお)」があります。サクラの名前や「桜」という文字は、女の子の名前として、人気なのです。

ウメがサクラをうらやましがっている四つ目は、サクラが童謡や唱歌に歌われることです。曲名は「さくら」であるとか「さくらさくら」であるとかいわれますが、「さくら さくら やよいの空は」などと歌われます。

ウメにも、文部省唱歌の「梅にうぐいす」というのがありますが、多くの人は、こ

の童謡を歌うこともないし、耳にすることもありません。ウメはサクラとともに、「ウメは咲いたか、サクラはまだかいな」と歌われることがあります。これは、小唄といわれるものです。節をつけて歌われますが、多くの人に口ずさんでもらえるものではありません。

ウメにとっては、サクラのように、童謡や唱歌に歌われることがないのが残念でしょう。

ウメには、サクラにはない特徴がいくつかあります。サクラは、ウメのそれらの特徴的な性質をうらやましがっているかもしれません。では、「サクラがウメをうらやんでいるというのは、どのようなことか」との「ふしぎ」が浮上します。

ウメがサクラからうらやましがられる特徴は、いろいろ考えられますが、その一つは「香り」でしょう。ウメの果実の最高級品といわれる「南高梅」の産地、和歌山県日高郡みなべ町の梅林は、「一目百万、^② 香り十里」と称されます。「ウメの木が百万本見わたせ、香りは十里(四十キロメートル)も飛びただよう」という意味です。

「百万本のウメの木がある」とたとえられる、南部梅林のウメの木は、実際は約八万本と発表されていますが、それらからだだよい出る香りは、風に乘れば、「十里も飛ぶ」と表現されます。

ただよう距離だけでなく、香りの質で、ウメの香りはひと味ちがうものになっています。かぐわしい香りを形容する言葉に「馥郁」という語句があります。これは、質の高い香りにしか似合わないものです。

この言葉にもっともふさわしいのが、高い香りをただよわせる花の中でも、とりわけウメの花なのです。「ウメは、馥郁とした香りをただよわせる」のように使われます。サクラには、このようにたとえられるほどの香りはなく、ウメをうらやましがっているでしょう。

ウメでは、花の季節が終わると、果実がなります。^③ これも、ウメがサクラからうらやましがられる特徴の一つです。ウメの果実は、梅ぼし、梅酒、大福茶などとして、私たちにいろいろ利用されています。サクラも小さな果実をつくることはありますが、私たち人間が食用とするものではないので興味もたれません。

「サクランボがあるではないか」と言う人がいるように、サクランボがサクラの果実と思われていることもあります。でも、サクランボは「オウトウ(桜桃)」という別の種類の樹木の果実です。

果実にまつわる、「モモ、クリ三年、カキ八年」という言い伝えがあります。これは、

発芽してからはじめて実がなるまでのおおよその年数を示しています。「モモやクリでは、芽が出てから三年目、カキでは、八年目になると、花が咲き、果実がではじめる」ということです。

この言い伝えには、続きがあります。たとえば、「モモ、クリ三年、カキ八年、ウメは酸い酸い十三年」といわれ、ウメが登場します。ただ、ウメは、実際には、芽が出てから花を咲かせ実をつけるまでに、十三年もかからず、二―三年です。

ウメの果実である梅ぼしの味について、よく「ふしぎ」に思われることがあります。梅ぼしの味は酸っぱいですが、この「酸っぱさ」は、主にクエン酸という「酸性」といわれる物質の味です。ですから、梅ぼしの味は、酸性の酸っぱさの代表として、多くの人に知られています。

I、梅ぼしは「アルカリ性食品」といわれます。「なぜ、酸性の酸っぱい味をしている梅ぼしが、アルカリ性食品といわれるのか」との「ふしぎ」が浮かびます。この「ふしぎ」には、梅ぼしの「ひみつ」の成分がかくされています。

「ある食品が、酸性であるか、アルカリ性であるか」は、味で決められるのではないのです。④その食品を燃焼させたあとに残る物質で、決まることになっています。梅ぼしを燃やすと、「酸性」といわれるクエン酸は残りません。

梅ぼしが燃えたあとには、カルシウムやマグネシウム、カリウムなどが多く残ります。これらの物質は、アルカリ性をもたらすもののなのです。そのため、からだをアルカリ性にするという意味で、梅ぼしはアルカリ性食品といわれるのです。

「なぜ、燃やしたあとの状態で決めるのか」との疑問があります。燃やしたあとの状態を調べるのは、この食品を食べて消化されたあと、からだの中に何が残るかを調べる方法なのです。食品を食べて体内で消化したあとにからだに残るものと、その食品を燃やすと残るものが、同じなのです。

また、サクラがウメをうらやましがらねばならない言い伝えもあります。⑤「サクラ切るばか、ウメ切らぬばか」です。これにはウメもサクラも名前が出てくるのですが、この言い伝えのために、サクラはウメをうらやましがらるのです。

これは、「サクラの枝は切つてはいけないが、ウメの枝は切らなければならない」という意味です。この言い伝えのおかげで、ウメは盆栽として多く栽培されるのに対し、サクラは盆栽にはなれないのです。

「ウメの枝は切らなければならない」ということは、ウメは枝を切らないと、枝が長くのび、花がきれいに咲かないだけでなく、木が大きくなり、ウメの果実が取りにくく

なることを示しています。また、木が大きくなりすぎると、できる果実の個数が減る傾向があります。

II、ウメは、枝を切っても病気になるににくいのです。だから、ウメは盆栽にしやすい、実際に、ウメの盆栽は多くあります。ウメの盆栽を展示する「盆梅展」が、毎年、各地で春早くに開かれます。

それに対し、サクラは、枝が切られると、その切り口から病原菌が入りこみ、病気になるやすいのです。ですから、サクラは盆栽には適しません。ただ、サクラの盆栽がまったくないわけではなく、ときどき見かけることはあります。しかし、それらは、枝を切っても病気になるににくいサクラの品種を選んでつくられているものです。ですから、ごくまれであり、めずらしいものです。

(田中修「植物のひみつ」による)

注 *1 文部省唱歌：かつて国の機関が小学校で歌うように定めた歌曲。

*2 大福茶：元旦を祝うお茶。梅ぼしやこんぶを入れて飲む。

*3 盆栽：観賞用に植木鉢で育てた草木。

(1) I と II に入る言葉の組み合わせとして最も適当なものを、次の中から選びなさい。

- | | | |
|---|-----------|-------------|
| ア | I II すなわち | II II さらに |
| イ | I II ところが | II II したがって |
| ウ | I II ところが | II II さらに |
| エ | I II すなわち | II II したがって |

(2) 線部①「ウメがサクラをうらやましがら二つ目は、葉っぱの香りです。」とありますが、その理由として最も適当なものを、次の中から選びなさい。

- ア 虫がサクラの葉っぱをいやがるのはクマリンのためであること。
- イ 人間に好まれる香りを出してサクラと人間が共存していること。
- ウ 桜もちなど人間の食用に利用されることで広く人気があること。
- エ 葉っぱから出るよい香りには虫を追いはらうき目もあること。

(3) 〰〰〰 線部「童謡」、「唱歌」、「小唄」とありますが、これらは文章中でどのようなものと説明されていますか。最も適当なものを次の中から選びなさい。

- ア 童謡や唱歌は子どもが歌うものだが、小唄を歌う子どもはいない。
- イ ウメは小唄には歌われても、童謡や唱歌にはほとんど出てこない。
- ウ サクラは童謡や唱歌には出てくるが、小唄に歌われることはない。
- エ 小唄は童謡や唱歌とはちがいで、多くの人に口ずさまれることはない。

(4) 〰 線部②「香り十里」とありますが、この言葉はどういうことを表していますか。最も適当なものを次の中から選びなさい。

- ア ウメの香りがたいへんに強いこと。
- イ ウメの香りが風に乗りやすいこと。
- ウ ウメの香りの質がとてよいこと。
- エ ウメの香りにちなんだ語があること。

(5) 〰 線部③「これも、ウメがサクラからうらやましがられる特徴の一つです。」とありますが、この「特徴」の説明として最も適当なものを、次の中から選びなさい。

- ア ウメの果実は、サクラほど時間がかからずに大きな実が実ること。
- イ ウメは、サクラとちがつてかぐわしい香りの果実を実らせること。
- ウ サクランボの人氣は高いが、果実としてはウメよりも小さいこと。
- エ サクラの実は、ウメの果実のように食用として注目されないこと。

(6) 〰 線部④「その食品を燃焼させたあとに残る物質で、決まることになっています。」とありますが、なぜ食品を燃焼させるのですか。その理由を次の中の二つを組み合わせて説明しようとする時、最も適当な二つを選びなさい。

- ア 梅はしを食べた時の味は、消化したあとで体に残る物質に左右されるから。
- イ 食品を燃焼させると、〴〵の成分が消えて、本当の性質が判断できるから。
- ウ 食べて消化したあとに残る物質は、燃焼したあとに残る物質と変わらないから。
- エ 食品を食べて体内で消化したあとの物質で、酸性かアルカリ性かが決まるから。
- オ 梅はしの酸っぱい味の〴〵は、クエン酸の成分の中にかくれているから。

(7) 〰 線部⑤「サクラ切るばか、ウメ切らぬばか」とありますが、この言い伝えについて、なぜサクラはウメをうらやましがするのかを説明したものととして、最も適当なものを次の中から選びなさい。

- ア ウメは枝を切る栽培方法が適していて、盆栽として観賞されることが多いから。
- イ サクラは枝を切ると病気になるので、木が大きくなりすぎてしまうから。
- ウ ウメは枝を切っても病気にはなりにくく、観賞するのに手間がかからないから。
- エ サクラは言い伝えのために枝を切ることができず、盆栽にすることはないから。

(8) この文章の話の進め方や表現の特色を説明したものととして適当なものを、次の中から二つ選びなさい。

- ア 古い言い伝えをふり返りながら、二つの植物が長く日本人に親しまれてきたことを明らかにし、最後にどちらがすぐれているかの結論を導き出している。
- イ 文章の前半と後半とを対比する内容を書くことで、二つの植物の良いところにそれぞれふれながら、二つの植物に共通する特徴の存在を証明している。
- ウ 二つの植物を比べる視点からいくつもの疑問が示され、その疑問が、はば広く日本の文化や科学的な事実にもとづいてわかりやすく解き明かされている。
- エ 最も言いたいことが最初に示され、次にそれを確かめられるような具体例が数多く書かれたあと、二つの植物のことから発展した内容につなげている。
- オ 日ごろ気づかない二つの植物の〴〵について、人間にたとえた表現を多く用いることで、読者が親しみやすく考えられるようにくふうされている。

国語 解答用紙（平成三十一年度）

【三】		
(7)	(5)	(1)
(8)	(6)	(2)
と	と	
		(3)
		(4)

[illegible]

受験番号	
------	--

(国語)

※記入しないこと